



Title	八重山語波照間方言の分詞：単独形式と接語が付加した形式の機能
Author(s)	麻生, 玲子
Citation	北方言語研究, 3: 55-68
Issue Date	2013-03-25
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/52599">http://hdl.handle.net/2115/52599</a>
Type	bulletin (article)
File Information	05_ASO.pdf



[Instructions for use](#)

[特集 動詞屈折形式]

八重山語波照間方言の分詞 —単独形式と接語が付加した形式の機能—

麻生 玲子

(東京外国語大学大学院 博士課程・日本学術振興会特別研究員)

1. はじめに

琉球諸語八重山語波照間方言<sup>1</sup> (以下、波照間方言) は、日本最南端の有人島・波照間島 (沖縄県八重山郡竹富町) でおよそ 70 歳以上の人々によって日常的に話されている言語である。波照間方言の動詞は、いかなる接語も付加しない「単独形式」であれば統語機能と形式がほぼ一対一で対応し、一見シンプルに「定動詞」「分詞」「副動詞」に分類できる。しかし、本稿で「はだか分詞」と呼ぶ分詞に関しては、同じ動詞形式であっても後続する接語によって統語機能は様々に変わる。例えば (1) に示した例文中の 2 つの動詞 *musaha*、*narja* は、形式的にはどちらもはだか分詞である。しかし、*musaha* は単独形式で連体節述語、次の *narja* は接語=*wa* を付加し主節述語として機能している。このように、単独形式とそれに接語が付加した形式の統語機能が異なることが、波照間方言の動詞の特徴である。

- (1)      *mana*    *ma*,        *musaha*            *panasi=n*            *nar-ja=wa*.  
         今        まあ        面白い(PTCP)      話=ADD            なる-DUR(PTCP)=DSC

「今ではまあ、面白い話にもなっているよね。」

本稿では、波照間方言の動詞とその統語機能について、単独形式の場合と、接語が付加した場合に分けて記述する。次の 2 節で動詞形態法を述べた後、3 節から 5 節で定動詞、分詞、副動詞の各動詞形式と機能を概観する。その後 6 節では、はだか分詞に接語が加わることにより、単独形式では持ちえなかった統語機能が生じる例について述べる。その際、主節述語機能を与える接語と単独形式で主節述語として機能する動詞の例から、主節述語には形態素タイプの如何を問わず、モダリティ要素が要求されることを指摘する。最後に 7 節では、動詞の単独形式と統語機能を結び付けた動詞分類法が、波照間方言に適したものかどうか検討する。

2. 動詞形態法の概要

波照間方言の動詞構造、および接辞の承接順序は表 1 のとおりである。動詞は、基本的に動詞語幹に語尾 (定動詞語尾、分詞語尾、副動詞語尾のいずれか) が付加する。ただし分詞には 2 種類あり、そのうちの 1 つの形式については、語尾が付加しない。(2) に動詞語

<sup>1</sup> 本稿は日本言語学会第 144 回大会のワークショップ「東アジア接尾辞型諸言語における動詞屈折形式：分詞に関する問題を中心に」(2012 年 6 月 16 日、於：東京外国語大学)における発表に基づくものである。本稿では、波照間島に在住する田盛吉さん (70 代女性)、鳩間末さん (80 代女性)、宮良英子さん (80 代女性)、屋良屋ヒデさん (80 代女性) から得たデータを使用した。波照間方言の音素は以下のとおり：  
/p, b, t [t~tɛ], d [d~z], k, g, f, s [s~ɛ], c [tʃ], z, h, m, n, r [r~rʃ], w, j, i, ī [i~ī], e, a, o, u/。

根に定動詞語尾（直説法 1）を付加した形式、(3) に語尾が付加しない分詞形式の例を挙げる。

- (2)      **ba**      **sa**      **numu-n.**  
          1SG      お茶      飲む-IND  
 「私はお茶を飲む。」

- (3)      **date**      **butu**      **mucu**      **sjami=na?**  
          2SG.TOP 夫      持つ(PTCP)      つもり=Q  
 「お前は夫を持つ（結婚する）つもりか？」

表 1 動詞の構造と接辞の承接順序

語根	派生接辞	屈折接辞 <sup>2</sup>		
	態	極性・アスペクト	テンス	語尾
他動詞化-使役-受身 <sup>3</sup>		否定	過去	定動詞
		継続		分詞
		完了		副動詞

多くの場合、語根と語尾の間には、態、極性、アスペクト、テンスといった接辞が付加し、動詞語幹を形成する。なお、コリマ・ユカギール語（本特集長崎論文）と同様に、波照間方言は形容詞動詞型の言語である。形容詞的意味を持つ語幹には、動詞語尾が付加する。(4) に継続接辞-ja、過去接辞-ta、定動詞語尾-ro を付加した動詞の例、(5) に形容詞的意味を持つ動詞語幹 goha 「怖い」に定動詞語尾-n を付加した例を挙げる。

- (4)      **ija=nu**      <zaisan> **muc-i**      **ng-ja-ta-ro.**  
          父=GEN 財産      持つ-CVB.SEQ      行く-DUR-PST-IND  
 「父親の財産を持って行ったよ。」

- (5)      **bebi=ja**      **goha-ta-n.**  
          少し=TOP      怖い-PST-IND

<sup>2</sup> 多くの言語で屈折と派生の区別が困難のように、波照間方言でも屈折接辞と派生接辞をはっきり区別することは困難である。一般的に、屈折と派生を区別する際に、ある操作（波照間方言で言えば接辞法）の「義務性 (obligatoriness)」や「統語的関連性 (syntactic relevance)」などが上位の基準に挙げられることが多い (Booij 2006; Haspelmath and Sims 2010)。波照間方言の動詞が統語的に機能するには、定動詞、分詞、副動詞の語尾が義務的に近く、他の接辞はほとんど任意である。義務性を基準にすれば、動詞末尾に現れるこれら 3 つの接辞が屈折接辞であり、他の接辞はすべて派生接辞である。しかし、接辞の（語幹への）applicability および接辞が語幹の意味を変更しないかという条件、あるいは、副動詞には現れない接辞を加味すると、態を表す接辞と極性・アスペクトを表す接辞の間に大きな隔たりを感じることも確かである。本稿では、ひとまず態接辞と極性・アスペクト接辞の境界を屈折接辞と派生接辞の境界とみなし、記述する。

<sup>3</sup> 使役接辞と受身接辞が共起した例は見つかっていない。しかし、周辺の琉球諸語や日本語の例からこのような承接順序であると考えられる。

「少しは怖かった。」

本稿では、動詞にいかなる接語も付加しない形式を「単独形式」と呼び、以下の節では定動詞、2種類の分詞、副動詞の動詞形式、およびそれぞれの単独形式の統語機能について記述する。

### 3. 定動詞とその用法

定動詞語尾には、2種類の直説法 (-n, -(r)o)、命令法 (-(r)i~-e)、意志法 (-a)、禁止法 (-(-n)na) の5つがある。これらは「話者の、命題に対する責任の度合いや、確信の度合いを表す<sup>4</sup> (Saeed 1997)」ことから、ムード接辞とも呼べる。このうち、直説法以外の定動詞語尾は他の屈折接辞（否定接辞、継続接辞、過去接辞）と共に起しない。表2に動詞 *jumu* 「読む」の屈折パラダイムを示す。直説法は否定非過去の形式を欠く（否定非過去をどのように表すかについては4.2.2を参照）。

表2 波照間方言の動詞 *jumu* 「読む」の定動詞パラダイム

ムード	時制	肯定	肯定・継続	否定
直説法1	非過去	<i>jumu-n</i>	<i>jum-ja-n</i> <sup>5</sup>	該当なし
	過去	<i>jumu-ta-n</i>	<i>jum-ja-ta-n</i>	<i>jum-an-ta-n</i>
直説法2	非過去	<i>jum-o</i>	<i>jum-ja-ro</i>	該当なし
	過去	<i>jumu-ta-ro</i>	<i>jum-ja-ta-ro</i>	<i>jum-an-ta-ro</i>
命令法		<i>jum-i</i>		
意志法		<i>jum-a</i>		
禁止法		<i>jumu-na</i>		

定動詞は単独形式で主節述語として機能する。

(6) に直説法2、(7) に命令法の例を挙げる。

- (6)        *e=nu*                      *panasi=ndu*                      ***a-ta-ro***.  
               そう=GEN                      話=FOC                      ある-PST-IND

「そんな話があったよ。」

<sup>4</sup> 本稿では Saeed (1997: 125) に従ってモダリティを「話者の、命題に対する責任の度合いや、確信の度合いを表す表現形式」と定義する (“Modality is a cover term for devices which allow speakers to express varying degrees of commitment to, or belief in, a proposition.”)。モダリティのうち、動詞形式で表現されるものに関してムード（接辞）と呼ぶ。

<sup>5</sup> 直説法1の非過去継続の形式 *jum-ja-n* は、ピッチパターンの交替により完了と区別される。例：*jum-ja-n*（読む-DUR-IND）は、下降する音調で「今読んでいる」、語末モーラ-nのみを上昇させる音調で「読んだ（すでに読み終わった）」。*budur-ja-n*（踊る-DUR-IND）下降する音調で「今踊っている」、語末モーラ-nのみを上昇させる音調で「踊った（すでに踊り終わった）」。これまでのところ、直説法1の定動詞語尾-nが付加した非過去形式でのみ音調と意味の対立が明確である。



飲んでいる)が **fuciri** (薬) を修飾し、名詞句を形成している (はだか分詞の例は (8a)、(9a) を参照)。

- (10)    [[usina=nagi            **num-ja-ru**]<sub>連体節</sub>    **fuciri**]<sub>名詞句</sub>  
           沖縄=LOC            飲む-DUR-PTCP    薬  
           「沖縄で飲んでいる薬」

## 4.2. 主節述語用法

### 4.2.1. 節内の名詞句に焦点標識が付加される場合

分詞は、節内の名詞句に焦点標識が付加されている場合に限り、単独形式で主節述語として機能することがある。いわゆる「係り結び」のことである。しかし例は少ない<sup>7</sup>。これまでに2、3例程度見つかっているのみである。(11a)の質問に対しての答え(11b)は、**fuca** (草)に焦点標識=**ndu**が付加し、述語ははだか分詞の非過去形 **ho**「食べる」で占められている。

- (11)    a.            **pimiza=ja**            **agan**            **ho=na?**  
                  ヤギ=TOP            芋            食べる(PTCP)=Q  
                  「ヤギは芋を食べますか？」  
           b.            **ai,**            **pimiza=ja**            **fuca=ndu**            **ho.**  
                  いいえ ヤギ=TOP            草=FOC            食べる(PTCP)  
                  「いや、ヤギは草を食べるよ。」

RU 分詞もはだか分詞と同様に、節内の名詞句に焦点標識が付加されている場合に限り、単独形式で主節述語として機能することがある。

- (12)    **da=ndu**            **ba**            **tatag-ja-ta-ru.**  
           2SG=FOC            1SG            叩く-DUR-PST-PCTP  
           「お前が私を叩いた。」

しかしながら、焦点標識と分詞の呼応は必須ではない。確かに、否定非過去形(4.2.2 参照)を除き、分詞が主節述語として機能する際には、節内のいずれかの名詞句に必ず焦点標識が付加される。しかしその逆、すなわち「節内の名詞句に焦点標識が付加されれば、述語は必ず分詞である」とは言えない。(13)に、**fuca** (草)に焦点標識が付加し、主節述部が定動詞で占められる例を挙げる。

<sup>7</sup> 同じ波照間方言でも、書き言葉からことわざを音声記号化した資料(西岡2010)では、係り結びの現象が多く見られる。同系の言語を見渡すと、琉球諸語宮古語伊良部方言ではこの現象が頻出すると述べられている(下地2008:97)。

- (13)    p̄imiza=ja            fuca=ndu            **h-ja-ro.**  
          ヤギ=TOP            草=FOC            食べる-DUR-IND  
 「ヤギは草を食べているよ。」

#### 4.2.2. 否定非過去形の分詞の場合

単独形式で主節述語として機能できるのは、基本的に定動詞である。例えば、(14) は分詞の否定過去形であるが、主節述語として機能できない。主節述語として機能する場合には、(15) に挙げるように必ず定動詞語尾が付加される。

- (14)    \*ba            **ng-an-ta-ru.**  
          1SG        行く-NEG-PST-PTCP

- (15)    ba            **ng-an-ta-n.**  
          1SG        行く-NEG-PST-IND  
 「私は行かなかった。」

しかし (16) に挙げるように、RU 分詞の否定非過去の形式に限り、主節の述語として機能する。3 節の表 2 に見るように、否定非過去は定動詞パラダイムで欠けている。つまり RU 分詞の否定非過去形は、定動詞パラダイムで欠けている形式の機能を補う。

- (16)    ba            **ng-an-u.**  
          1SG        行く-NEG-PTCP  
 「私は行かない。」

### 5. 副動詞とその用法

副動詞語尾には、継起副動詞語尾 (-**(r)i**~**-e**~**-a**)、および同時副動詞語尾 (-**incana**~**-encana**~**-ancana**) がある。どちらも、否定接辞、継続接辞および過去接辞とは共起しない。

副動詞には副詞節述語としての機能がある。副動詞のうち、継起副動詞には、動詞を修飾する機能もある。

#### 5.1. 副詞節述語用法

副動詞は、単独形式で副詞節述語として機能する。(17) に継起副動詞の例、(18) に同時副動詞の例を挙げる。

- (17)    midumu-nda=ja    ina=ci    **ur-a,**            si+pan    **arah-e,**  
          女-PL=TOP        海=ALL 降りる-CVB.SEQ    手+足    洗う-CVB.SEQ  
 「女たちは海に降りて、手足を洗って... (岩の上を渡った)」

- (18) utama-nzi=ja unu nari=<o> ... h-encana,  
 子ども-PL-TOP あの 実=ACC 食べる-CVB.SIM  
 「子どもたちはその実を食べながら... (帰ってしまった)」

## 5.2. 動詞修飾用法

波照間方言の動詞句は「(補語+) 動詞 (+助動詞)」という構造を持つ。このうち、助動詞を用いる動詞句構造では、助動詞に先行する動詞に継起副動詞が用いられる。(19) に、継起副動詞 *tumari*、*eni* がそれぞれ助動詞に先行する例を挙げる。

- (19) [tumar-i boh-en-u]動詞句=ta=jo,  
 泊まる-CVB.SEQ 願望.AUX-NEG-PTCP=QUOT=DSC  
 [en-i o-ta] 動詞句=cju.  
 言う-CVB.SEQ 丁寧.AUX -PST(PTCP)=HS  
 「(あそこには) 泊まりたくないよね、言っちゃったそうだ。」

## 6. 接語が付加した場合のはだか分詞の用法

これまでそれぞれの動詞形式と単独形式の統語機能について見てきた。動詞は単独形式であれば、統語機能と形式はほぼ一対一で対応し、定動詞、分詞、副動詞に分けられる。すなわち、定動詞は主節述語として、分詞は一部主節述語としての用法があるものの主に連体節述語として、副動詞は副詞節述語、あるいは動詞修飾語として用いられる。

しかしこれらの動詞のうち、特にはだか分詞は後ろに付加される接語によって統語機能が様々に変わる。以下では「はだか分詞+接語」が主節述語として機能することと、主節述語に見られる特徴について述べる。さらに、はだか分詞に接語を付加し、副詞節述語として機能することも述べる。

### 6.1. 「はだか分詞+接語」の主節述語用法

4.2 節で、分詞が単独形式で主節述語として機能することを述べた。しかし、その環境は極めて限定的であると言える(焦点標識に呼応する分詞、および否定非過去形として機能する RU 分詞)。一方、はだか分詞に伝聞や推量、疑問を表す接語を付加することによって、分詞は主節述語として機能する。この「はだか分詞+接語」の形式は、日常会話および物語のテキストに頻出する。以下、(20) にはだか分詞に伝聞を表す接語=*cju* を付加した例、(21) に、はだか分詞に推量を表す接語=*kaja* を付加した例を挙げる。

- (20) midumu=ja zorozero=ta paku=<no> utama=<o>  
 女=TOP ぞろぞろ=QUOT 蛇=GEN 子供=ACC  
 nah-ja-ta=cju.  
 生む-DUR-PST(PTCP)=HS  
 「女はゾロゾロとヘビの子どもを産んだとき。」



- (21) ug-a k-i nu su=kaja.  
 起きる-CVB.SEQ 起動-CVB.SEQ 何 する(PTCP)=INFR  
 「起きてきて、何するかね？」

上記の例におけるはだか分詞は、どちらも主節述語として機能している。単独形式では持ち得なかった主節述語機能が、接語の付加により付与されたと考えられる。このようにはだか分詞に主節述語用法を与える接語には、例に挙げた=cju や=kaja の他、表 4 に挙げる接語がある。これらの接語は、話者の命題に対する態度、すなわちモーダルな意味を表していると言える。以下、(22) に疑問を表す接語=na、(23) に驚嘆を表す接語=sita、(24) に推量を表す接語=sa、(25) に確信を表す接語=te、(26) に命令を表す接語=ba がそれぞれはだか分詞に付加した例を挙げる<sup>8</sup>。

- (22) fusaha-ru munu a=na.  
 欲しい-PTCP もの ある(PTCP)=Q  
 「欲しいものはあるか？」

- (23) <nimocu>=ja k-i=sita, aca=nu pin  
 荷物=TOP 来る-CVB.SEQ=SEQ 明日=GEN 日  
**k-ja=sita.**  
 来る-DUR(PTCP)=SEQ  
 「荷物は（先に）来ていて、翌日（持ち主が）来ちゃったよ。」

- (24) hi=gara ndi-ta=sa.  
 家=ABL 出る-PST(PTCP)=INFR  
 「家から出たんでしょう？」

- (25) ba-ima=n e=ru ss-i ng-ja-ta=te.  
 1-PL=ADD そう=FOC 着る-CVB.SEQ 行く-DUR-PST(PTCP)=QUOT  
 「私たちもそんな風に（着物を）着て行ったよ。」

- (26) mac-i bir-ja=ba.  
 待つ-CVB.SEQ 進行.AUX-DUR(PTCP)=COND  
 「待っていないさい。」

<sup>8</sup> 接語=ba は、主節述語に現れる場合は疑問、驚嘆あるいは命令を表すが、副詞節述語（副動詞）に現れる場合は条件を表す。接語=sita は、主節述語に現れる場合は驚嘆を表し、副詞節述語（副動詞）に現れる場合は継起を表す（例文 (23) を参照）。接語=te は主節述語に現れる場合は確信を表すが、引用節を導く用法もある。このように接語は多様な用法を持つ。

表 4 主節述語用法を与える接語

意味	形式
伝聞	=cju
推量	=sa、=kaja、=paci
疑問	=na、=ra、=ba
驚嘆	=sita、=ba
確信	=wa、=te、=do
命令	=ba

表 4 に挙げた接語のうち、一部の接語（推量の接語=s<sub>a</sub>、=kaja など）は、はだか分詞のみならず、定動詞にも付加することがある。この場合、統語機能は変わらない。(27) に定動詞（直説法 1）に推量と確信を表す接語を付加した例を挙げる。

- (27) per-ja                      pitu=a    sis-ja-n=s<sub>a</sub>=w<sub>a</sub>.  
 入る-DUR(PTCP) 人=TOP 知る-DUR-IND=INFR=DSC  
 「入った人は知っているでしょうよ。」

## 6.2. 主節述語が要求するモダリティ要素

波照間方言において、主節述語として機能できる動詞は基本的に定動詞である。一方で、上述した通り「はだか分詞+モーダルな意味を表す接語」が生産的に主節述語として機能する。この 2 つの事実は、定動詞あるいは分詞という動詞形式からではなく、主節述語という統語的な観点から見ると、主節述語がモダリティを含む、という点で共通している（定動詞語尾をムード接辞とも呼べることは、すでに 3 節で述べたとおりである）。つまり波照間方言の主節述語が、形態素タイプの如何（接辞あるいは接語）を問わず、モダリティを要求していると考えられる。言い換えれば、動詞形式が定動詞であろうと分詞であろうと、述語形成段階の要求を満たせば主節述語として機能できるということである。

主節述語にモダリティ要素が必要であることは、広く琉球諸語に見られる。例えば、沖縄語中南部方言では主節述語として機能する動詞にムード接辞が必須要素として記述されており（宮良 2002）、宮古語平良方言に関しては「命令、意志などのようなモーダルな要素の強い文のみならず、叙述文からも話し手のムード的要素を除くことはできない（伊豆山 2011: 245）」と述べられている<sup>9</sup>。

## 6.3. 「はだか分詞+接語」の副詞節述語用法

5.1 節で、副動詞が副詞節述語として機能することを述べた。一方で、条件、理由、逆接といった前提要件を表す接語をはだか分詞に付加することにより、その動詞は副詞節述語

<sup>9</sup> 一方、同じ宮古語でも伊良部方言や大神方言では、分詞が主節述語機能を持つことも多い。下地 (2008) によると、伊良部方言ではニュートラルな叙述・一般的な真実、習慣、驚きを表す場合、分詞が（単独形式で）主節述語として機能することができる。大神方言では接辞や接語が何も付加しないはだかの動詞語幹が、一般的な非過去の事象を述べるのに用いられる (Pellard 2010)。

として機能する。(28) に、理由を表す接語=ki を付加した分詞の例を挙げる。理由を表す接語=ki は、(29) に挙げるように副動詞にも付加する。

- (28)    unu        midumu=ja        dera        **abaris-ja=ki,**        meju  
           その    女=TOP            大変        きれい-DUR(PTCP)=理由    毎晩  
           <koodansi=no>    bidumu=ndu        ku-ta=cju.  
           好男子=GEN        男=FOC            来る-PST(PTCP)=HS  
           「その女はとてもきれいだったので、毎晩、好男子の男が来たとき。」

- (29)    kuri        num-an=cja=jo,        sin-i  
           これ    飲む-NEG(PTCP)=COND=DSC 死ぬ-CVB.SEQ  
           su=gara=ta=jo,        <kangofu>=ga=jo,  
           する(PTCP)=理由=QUOT=DSC        看護婦=DAT=DSC  
           **en-i=ki,**                <minna oowaraisite>=jo,  
           言う-CVB.SEQ=理由        皆        大笑いして=DSC  
           「これを飲まなかったらね、死ぬからとね、看護婦にね、言うから、皆大笑いしてね...」

接語=ki のように、はだか分詞に副詞節述語用法を与える接語を表 5 に挙げる。

表 5 副詞節述語用法を与える接語

意味	形式
条件	=cja、=ra、=ba
理由	=gara、=ki
逆接	=sika
限界	=bagi

これらの接語は基本的にはだか分詞に付加する。しかし接語によっては定動詞や副動詞に付加されることもある。その組み合わせには一定の制限がある。例えば先に (29) に挙げたように理由を表す接語=ki ははだか分詞の他、副動詞にも付加する。一方、逆接を表す接語=sika は、分詞および定動詞（直説法 1）に付加するが、副動詞には付加しない。(30) に分詞および定動詞に逆接を表す接語=sika を付加した例を挙げる。はじめにはだか分詞 mu（思う）、次に定動詞 arahjan（洗っている）に接語=sika を付加し、それぞれが副詞節述語として機能している。

- (30)    mizi=si    arah-ja-n=ta                                **mu=sika,**        me=nu    pin  
           水=INS    洗う-DUR-IND=QUOT                      思う(PTCP)=逆接    前=GEN    日  
           **arah-ja-n=sika,**                      unu        pin=ja    nu=n    arah-an-u.  
           洗う-DUR-IND=逆接                      あの        日=TOP    何=ADD    洗う-NEG-PTCP  
           「(当時は) 水で洗っていると思うけど、前の日に洗っているけど、(焼香の) 当日は何も

洗わない。」

## 7. まとめ

波照間方言の動詞の単独形式は、統語機能とほぼ一対一で対応している。しかし、はだか分詞に関しては、動詞の外側の要素、つまり接語によって語の統語機能が様々に変わることを見てきた。これらのことを表5にまとめる。

表5 動詞の単独形式の機能と単独形式に接語を付加した場合の機能

動詞形式	単独形式	+モーダルな接語	+前提要件を表す接語
定動詞	主節述語	主節述語	(一部副詞節述語)
はだか分詞	連体節述語 (一部主節述語)	主節述語	副詞節述語
RU分詞	連体節述語 (一部主節述語)	該当なし	該当なし
副動詞	副詞節述語	該当なし	副詞節述語

はだか分詞は接語を付加することで、主節述語あるいは副詞節述語として機能する一方、RU分詞にはそのような用法はない。なぜ一部機能を同じにしながらも異なる2つの分詞があるのか、という問いには、以下の2つの可能性が考えられる。1つ目は、RU分詞の-(r)uが脱落し、その結果、はだか分詞が生じたという通時的な可能性である。つまり、もともとRU分詞と接語が組み合わさって主節述語あるいは副詞節述語として頻繁に使用されるうちに、-(r)uが脱落したという変化である。実際にどの程度頻繁に用いられているかについて、談話テキスト<sup>10</sup>に現れた動詞形式の頻度を機能別にまとめたものを表6に挙げる。この結果を見ると、主節述語のうち「はだか分詞+接語」は30%、副詞節述語に至っては「はだか分詞+接語」はおよそ半分の割合を占めている。

2つ目は、1つ目の可能性の中でも、もともと「連体節述語+名詞」の述語構造であった可能性である。表4および表5に挙げた接語のうち、推量を表す=paci、逆接を表す=sikaは、名詞を起源とする可能性が高い<sup>11</sup>。この2つの接語に限れば、以前「連体節述語+名詞」の構造であったものが、現在は主節述語(=paci)および副詞節述語(=sika)として機能していると考えられる。ただし、表4および表5に挙げた他の接語の起源については明らかでなく、したがって、すべての接語にこのような歴史的変遷を想定することはできない。

<sup>10</sup> 筆者が自ら収集したテキストデータのうち、およそ30分(会話11話、語り1話)分の談話テキストを使用した。

<sup>11</sup> 波照間方言の=paci、=sikaは、それぞれ沖縄語首里方言(古語)の「ハズィ」、「スイガ」と同起源と考えられる形式である。沖縄古語大辞典編集委員会(1995)によれば、「ハズィ」は名詞「筈」から、「スイガ」は、準体助詞(形式名詞)「す」と逆接の接続助詞「が」から成り立ったものである。このように名詞を起源とする可能性を示唆する記述は、宮城(2003)(八重山語石垣(四箇)方言の「ハジッ」、「ソング」)および、Shimoji(2008)(宮古語伊良部方言の=pazi、=suga)などにも見られる。

表 6 機能別に見た動詞形式のテキスト中の頻度

機能	動詞形式	例数(割合)
主節述語 (200 例中)	定動詞 (+接語)	106 (53%)
	はだか分詞+接語	60 (30%)
	はだか分詞	0 (0%)
	RU 分詞 <sup>12</sup>	34 (17%)
副詞節述語 (254 例中)	定動詞	2 (1%)
	はだか分詞+接語	120 (47%)
	副動詞 (+接語)	132 (52%)

従来、アルタイ型言語の文法記述においては、動詞形式を統語機能と結び付け、それ自身で終止できる動詞形式か、あるいは他の語に接続する動詞形式かという「きれつづき」による分類がなされてきた。表 5 に見るように、単独形式では定動詞(きれ)、分詞(一部きれ・主につづき<sup>13</sup>)、副動詞(つづき)の分類は有効に見える。しかし波照間方言のはだか分詞は、後続する接語の有無や種類により連体節述語、主節述語、副詞節述語として機能する。このことは、RU 分詞とは異なり、はだか分詞には「きれつづき」といった生来の機能的な含みがないという可能性を示唆している。もしそうだとすれば、単独形式の機能が共通しているからという理由、あるいは通時的に起源が同じであるかもしれないという理由で、共時的にはだか分詞と RU 分詞を同じ「分詞」というカテゴリーで扱うことの是非について、さらに検討する必要がある。

以上、波照間方言の動詞屈折形式について、本稿では次のような指摘をした。

[1] 単独形式のみならず、動詞に後続する接語が統語機能を決定する役割を担う。

[2] 主節述語では、形態素タイプの如何を問わずモダリティ要素が必須である。

[3] RU 分詞とはだか分詞は、一部共通の機能を持ち、さらに共通の起源を持つ可能性があるものの、共時的には振る舞いかなり異なる。特にはだか分詞は、RU 分詞とは異なり、接語を付加することで幅広い用法を持つようになる。本稿では同じ「分詞」として扱ったが、この2つの分詞の扱い方についてはさらに検討する必要がある。

<sup>12</sup> 34 例中、32 例は否定非過去の例、2 例は係り結びの例である。

<sup>13</sup> Shimoji (2011) では、宮古語伊良部方言の動詞を dependency という指標を用いて、きれつづきの性格付けをしている(きれ: Independent、きれ・つづき: Ambidependent、つづき: Dependent)。

## 略号一覧

1 : 1 人称	ALL : 向格	HON : 尊敬	PST : 過去
2 : 2 人称	AUX : 助動詞	HS : 伝聞	PTCP : 分詞
- : 接辞境界	COND : 条件	IMP : 命令	Q : 疑問
= : 接語境界	CVB : 副動詞	IND : 直説法	QUOT : 引用
+ : 複合語境界	DAT : 与格	INFR : 推量	SEQ : 継起
<> : 借用語	DSC : 談話標識	INS : 具格	SG : 単数
ABL : 奪格	DUR : 継続	LOC : 位格	SIM : 同時
ACC : 対格	FOC : 焦点標識	NEG : 否定	TOP : 話題標識
ADD : 付加	GEN : 属格	PL : 複数	

## 参考文献

- Booij, Geert. 2006. “Inflection and Derivation”, in Brown, Keith ed. *Encyclopedia of Language & Linguistics*, Vol. 5, Amsterdam/Tokyo: Elsevier, 654–661.
- Haspelmath, Martin and Andrea D. Sims. 2010. *Understanding Morphology*, Understanding Language Series, London: Hodder Education, 2nd edition.
- 伊豆山敦子. 2011. 『琉球のことばと人—エヴィデンシャリティーへの道—』東京: 真珠書院.
- 宮城信勇. 2003. 『石垣方言辞典』沖縄: 沖縄タイムス社.
- 宮良信詳. 2002. 「沖縄中南部方言動詞のモダリティ」『言語研究』第 122 号, 79–113.
- 西岡敏. 2010. 「波照間方言のことわざ集—『波照間島の歴史・伝説考—仲本信幸遺稿集—』をもとにしての音声記号化の試み—」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』第 14 卷, 第 2 号, 1–26.
- 沖縄古語大辞典編集委員会 (編). 1995. 『沖縄古語大辞典』東京: 角川書店.
- Pellard, Thomas. 2010. “Ōgami (Miyako Ryukyuan)”, in Shimoji, Michinori and Thomas Pellard eds. *An Introduction to Ryukyuan Languages*, Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 113–166.
- Saeed, John I. 1997. *Semantics*, Oxford: Blackwell.
- 下地理則. 2008. 「伊良部島方言の動詞屈折形態論」『琉球の方言』第 32 卷, 69–114.
- Shimoji, Michinori. 2008. *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*. Ph.D. thesis, The Australian National University.
- Shimoji, Michinori. 2011. “Irabu Ryukyuan”, in Yamakoshi, Yasuhiro ed. *Grammatical Sketches from the Field*, Tokyo : Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, 79–136.

Participles in Hateruma (Yaeyama Ryukyuan):  
Functions of Plain Forms and Cliticized Forms

Reiko ASO  
(Tokyo University of Foreign Studies / JSPS)

In Hateruma, each plain form of verbs corresponds to each syntactic function, that is, a predicate of the main clause, adnominal clause, or adverbial clause. Therefore, it seems that each form can be classified as finite, participle, and converb. However, this is not the case when some clitics attach to a certain participle, called “bare participle” in this paper. This paper provides a description of verb forms and its functions, distinguishing plain verb forms from verbs with clitics to show that some clitics provide bare participles with new functions. The author suggests that in Hateruma, the practice of classifying verbs in terms of correspondence between forms and functions needs further discussion especially for participles, since the syntactic functions of bare participles cannot be determined simply from plain verb forms.

(あそう・れいこ asoreiko@gmail.com)